



香芝市二上山博物館 常設展案内シート

「サヌカイト」とは

二上山とその周辺地域には噴火によって生み出された多くの火成岩が分布していますが、なかでもサヌカイト、^{ぎょうかいがん}凝灰岩、^{こんごうしゃ}金剛砂(ガーネット)はその後の人類文化の発展に大きく寄与した岩石、鉱物です。まずは石器の材料となったサヌカイトを紹介します。

■サヌカイトとは

二上山北麓から西麓にかけて、数万年前の後期旧石器時代から2千年前の弥生時代まで、サヌカイト製石器の原産地遺跡群が存在することは、奈良県立橿原考古学研究所が実施した二上山総合調査(1956～57年)、そして1974年に同志社大学旧石器文化談話会の継続的分布調査の成果、『ふたがみ』が刊行されて以降、その重要性が一躍全国的に知られるようになりました。

サヌカイトは^{むはんしょうしつ ことうきせき}無斑晶質古銅輝石安山岩とよばれ、1891年にドイツ人のワインシエンク(E.Weinschenk)が香川県の旧国名「讃岐国」に因んで名づけました。その後、1916年に^{ことうぶんじろう}小藤文次郎は、瀬戸内地域に分布する瀬戸内火山岩類のうちサヌカイトと似かよった岩石をサヌキトイドとよびました。代表的な産地は、瀬戸内海の景勝地「五色台」(香川県)周辺や二上山(奈良県/大阪府)、鬼ノ鼻山(佐賀県)などが知られています。



春日山火山岩・サヌカイト(羽曳野市株山)



桜ヶ丘第1地点遺跡出土の旧石器



鶴峯荘第1地点遺跡出土の旧石器



鶴峯荘第1地点遺跡出土の旧石器(接合資料)

サヌカイトはガラス質の岩石で、打ち欠くと二枚貝の貝殻状に割れて縁に鋭利な刃ができることから、打製石器の原材料として各地でさかんに利用されました。近畿地方で最大規模を誇る二上山のサヌカイトは、理化学的手法の蛍光X線分析法で調べると、時代によって違いはありますが、ほぼ近畿地方全域にいきわたっていたことがわかります。とくに旧石器時代には、瀬戸内技法という石器づくりの技術を共有しており、いわゆる「二上山文化圏」を形成していました。

二上山麓において後期旧石器時代の遺跡は70ヶ所上知られています。香芝市では、1981年から継続的に発掘調査を実施し、地下のサヌカイト原石を掘り出した探掘坑が見つかった鶴峯荘第1地点遺跡や長野県産の黒曜石製の石器が出土した桜ヶ丘第1地点遺跡など、近畿地方の旧石器時代を代表する遺跡が所在し、瀬戸内技法や国府石器群を研究するうえで、第一級の資料を蓄積しています。

■ 鶴峯荘第1地点遺跡の探掘坑



鶴峯荘第1地点遺跡土坑2と調査区

鶴峯荘第1地点遺跡の発掘調査で土坑から7,000点をこえるサヌカイト製石器が出土しました。土坑(平面2.5m×3.5m以上、深度1.0mの不整形)の形状や地下のサヌカイト礫の包含状況、埋土の状況から石器石材としてのサヌカイト礫の探掘坑と考えられ、日本列島では現在のところ最古にして唯一の石材探掘坑と思われる。二上山博物館では、当時の状況を想定復元したジオラマで詳しく紹介しています。



鶴峯荘第1地点遺跡土坑2ジオラマ



平地山遺跡のサヌカイト探掘坑群